民俗学の視点を取り入れた社会科学習
～第４展示室の正月展示を活用した「お正月調べ」と「お正月カード」作成によるプレゼンテーション活動を中心として～

東京学芸大学附属世田谷中学校　秋山　寿彦

１　実施学年および教科領域　中学校　２年生　社会科

２　学習のねらいと民俗資料活用との関連

（１）　単元名　『おせち料理と雑煮を中心として「お正月」を調べてみよう』

（２）　ねらい

①　学習指導要領との関連

国立歴史民俗博物館の大きな特色といえる民俗学の成果を反映した民俗展示は、社会科・地理歴史科学習指導要領においても言及されている。しかし、中学校社会科において民俗学の視点が、生徒や教師に十分に意識されているとは言い難い状況がみられる。社会科学習が始まる小学校 3 年生では、生活に必要な道具に焦点を当てて、むかしの生活を探究することや地域に伝えられている祭や伝統行事を、祖父母や身近に暮らす地域の人々に対する聞き取り（インタビュー）活動やフィールドワークを通して探究する民俗学との親和性の高い学習が位置づけられている。

これまでの博学連携の実践報告においても、民俗学の視点が明確な事例としては、小関勇次による改修前の第４展示室の旧展示、「比婆荒神神楽」に関する伝統芸能に着目した檜枝岐歌舞伎や歴博展示室についてのパンフレット作成についての実践が見られる程度である。地域に生きた人々の生活、年中行事や祭りを中心とした伝統や文化という民俗学の研究対象は、民俗学の提唱者である柳田国男が、戦後初期に発足したばかりの社会科において接近を試みた学習内容でもある。しかし、今日の中学校社会科では、こうした民俗学の視点は、生徒や教師にとって学習の後景に追いやられている状況にある。

現行の学習指導要領では、中学校社会科においては、歴史的分野の学習では、（３）内容の取り扱いのクで、民俗学の成果の活用や博物館、郷土資料館の見学・調査を通して、衣食住、年中行事、労働、信仰などに目を向け日本人の生活や生活に根ざした文化を具体的に学んでいくことが示されている。同時に、地理的分野の日本の諸地域についての内容の取り扱い（ウ）において地域に暮らす人々の生活・文化、地域の伝統や歴史的背景を踏まえた学習に留意する必要が示されている。

これらのことから民俗に関わる学習や博物館、郷土資料館の見学・調査を取り入れた学習は、歴史的分野だけではなく、地理的分野および地理的事項との関わりにも配慮した「分野間の連携」型社会科として、学習指導の工夫を試みていくことにより、生徒の社会的事象に対する多面的・多角的な見方・考え方を育て、深めていくことが期待できる。

本単元は、地理的分野の日本の諸地域に関する学習のまとめとして位置づけ、生徒がお正月を身近に意識する 12 月から１月という時期を意識して設定した学習である。

また、本単元の学習は、歴博の展示及び関連資料の活用を図ることにより、学習指導要

領も視野にととらえている教育に関するグローバルスタンダードの方向性を示しているOECD や国際バカロレア機構（IBO）が提唱するこれからの学習において重視する生徒の調査・表現活動を取り入れた主体的な学びと生徒自身による新しい価値の発見と創造に迫っていくことを意図している。

② 単元の目標

- 正月には、歳神様を迎え新しい年の豊かさと繁栄を願う人々の心性を反映する年中行事が多く見られ、日本の伝統と深く結びついていることを理解している。
- 正月に関する学習資料（おせち料理に関する歴博第４展示室についての動画、漫画・「美味しん坊」、テレビ番組・「食菜の王国：雑煮」、2021 年 11 月 11 日読売新聞・「伝統を学ぶ年末年始」）を読み解き、正月の年中行事の意味について具体的かつ概念的に理解している。
- 民俗事象について身近な人に直接、聞き取る技能や歴博の正月に関する展示資料（動画や写真）を多面的多角的に読み解く技能を獲得する。
- おせち料理や正月に行われている年中行事の意味を多面的・多角的に考察するとともに、特に、雑煮に着目し日本列島各地域の多様性に気づき、「わが家のお正月」をポスターカードの作成・表現し、プレゼンテーションの原稿をまとめる。
- 「わが家のお正月」の準備に関心をもち、家族の一員として参加し、家族からお正月の生活について話を聞きことを中心とする調査活動に取り組むことができる。
- 「わが家のお正月」についての調査活動に基づいて、小集団でのコミュニケーション活動に意欲的に取り組むことができる。
- 「わが家のお正月」についてのプレゼンテーションに取り組んで、正月や伝統について新たに気がついたことを文章にまとめ、新聞の投書欄に意見として発信することに取り組むことができる。

（３）国立歴史民俗博物館の民俗資料活用

① 活用方法　非来館（アウトリーチ）型活用

② 活用資料　第４展示室（民俗）の多様なおせち料理と鏡餅についての写真
歴博・山田慎也先生のおせち料理に関する展示解説（2021 年 12 月 25 日 NHK「週刊まるわかりニュース」）

（４）指導観

多くの生徒は、正月のおせち料理や雑煮は、どこの家庭でも同じようなものを食べていると思っている。中学生に限らず私たちには他の家のおせち料理や雑煮を食べる機会が少ないためこのような生徒の思いは至極、当然ともいえる。だから、雑煮の餅の形、味付け、具材の地方ごとに見られる多様性に素朴な驚きを感じる。

また、１２月に入ると正月は待ち遠しく楽しいものと感じているが、正月の伝統行事やその意味について地理的・歴史的な社会科学習の視点から目を向ける機会は意外とも思われるぐらいに少ない。

すでにおせち料理は、デパートやスーパーで重箱単位で購入する食べ物と認識されるようになって久しいといえるが、それが高度経済成長期以降の「新しい伝統」であるということには、ほとんどの生徒が気がついていない。

遡ればおせち料理が、元来、歳神様を迎えるために旧民法下の時代まで「家長」と位置

づけられていた男性が準備するものであったことと認識されることもほとんどなくなっている。おせち料理は、女性による食事の準備（日常の家事労働）からのつかの間の「解放」であるということが、現在、多くの人々のお節料理に対する認識の起点となっていると考えられる。こうしたなかお節料理を中心とする民俗事象の理解から、正月に、家族でふるさとに帰省すると「実家」のおせち料理が手作りであったり、東京・神奈川で暮らす自分の家の味と異なり、地域性が感じられることに新鮮な発見を覚える生徒も少なくない。

また、韓国・中国（台湾）・ミャンマー・インド・カナダなど外国にルーツを有する生徒も在籍し、中華・イタリアン・フレンチなどの多様なおせち料理も店頭に並ぶようになっていることから、日本の伝統や文化となっている正月行事を旧暦に重きを置く東アジアを中心としてグローバルな視野からもとらえていく視点も大切にしていきたい。

民俗に関わる歴博の第４展示室の正月に関する展示に目を向けることにより、日本列島で人々が伝統や文化として大切にしてきたものの共通性と多様性、そして新たな時代を迎える中での伝統や文化の変容に生徒一人一人が気づいていくようになることを期待して学習を支援・指導していきたい。そして、私たちの生活の中に見られる年中行事・祭・衣食住・労働（仕事）・信仰などの民俗事象や民俗事象に対する人々の思い・感情を社会科地理・歴史的分野の学習に位置づけていくことを試み、民俗事象を媒介として地理・歴史の分野間連携型社会科学習の構築を試みていきたい。

３　指導計画（４時間扱い）

第１次　「お正月」を調べる準備に取り組もう。

- 歴博第４展示室のおせち料理の写真
- 漫画「美味しん坊　おせち料理」と世界文化遺産に登録された「和食」を代表するお節料理（NHK「世界遺産」）の視聴
- スーパーマーケット、デパート、コンビニエンスストアなどでおせち料理のパンフレットの収集
- 私が２０２２年のお正月に食べたいおせち料理
- お正月にわが家で行う年中行事（2021 年 11 月 11 日・読売新聞　「伝統を学ぶ　年末年始」）

第２次　「お雑煮」

- テレビ朝日・「食菜の王国　お雑煮」の視聴
- 雑煮を調べる観点（餅の形、味付け、具材）
- 「冬休み」の課題、「わが家のお正月調べ」の記入シートの配布と説明

第３次 「お正月」についてのプレゼンテーションの準備に取り組もう。

- プレゼンテーションカード作成
- 発表原稿の作成

第４次（授業実践）「お正月」調べについてのグループプレゼンテーション

- 自分の家のお節料理、雑煮、正月にかかわる行事について作成したプレゼンテーションカードを提示しながら小集団で発表
- 小集団での他の生徒の発表からの気づきや発見をメモとして記述

4　授業実践の概要

【本時の探究を深めるための「中心的な問い」】

『「お正月」にかかわる料理や行事には、どのような思いや願いが込められているのだろうか。また、友達が過ごした正月と共通する点や異なる点に目を向け、正月を多面的多角的にとらえてみることでどのような新しい発見があるだろうか。』

	学習内容・活動	指導上の留意点と評価の観点
導入	正月の飾り（ミニ門松・しめ縄・鏡餅）や正月遊びの道具（双六・かるた・福笑い）を提示し、正月の楽しみや遊びから2022年の「わが家のお正月」を振り返る。	伝統的な正月の過ごし方が自分の生活の中にどの程度生きているかという点に目を向ける。
	NHK・「週刊ニュースまるわかり」で紹介された歴博の正月の民俗展示についての山田慎也先生の解説をDVDで紹介する。 ・どうして正月の料理や飾りが、国立の博物館で展示されたり、専門研究の対象となるのだろうか。	正月を迎える町の様子（正月飾りを販売するテント・デパートやスーパーマーケットのお節料理売り場）についての写真を補助資料としてモニターに提示する。
展開	「お正月」について作成したプレゼンテーションカードをグループのメンバーに回して、お雑煮やお節料理にみられる特色を確かめてみよう。 プレゼンテーションの内容についての文章に目を通し、原稿を見ずに報告できるように練習する。	プレゼンテーションカードに表現されている工夫や良いと感じられる点に注目していくようにアドバイスする。 プレゼンテーションの順番と時間（4分）の確認 プレゼンテーションでは作成したカードの効果的な活用をすすめる。
	「お正月」についてのプレゼンテーション ・プレゼンテーション内容に対する質問と感想・意見を交換する。 ・プレゼンテーションから自分の家の正月と友達の正月の共通点と異なる点の両面に目を向ける。 ・雑煮の味付けや具材の違いから正月文化の多様性を考察する。	どのような気持ち・感情で正月を迎えたかという点にもプレゼンテーションで触れるようにする。 友達のプレゼンテーションから気が付いたことをワークシートにメモとして書き残す。
	「お正月」についてのグループでの発表にみられる特色を学級全体に報告する。 ・正月には、雑煮にみられるように各地域の特色をそれぞれの家で受けついている。 ・正月の生活の日常と異なる点に伝統や文化	本時の活動を通して、正月に対する自分の気づきや思いをまとめ、新聞各社の意見投書欄へ発信することにチャレンジするようにすすめる。

まとめ	が残っていて、正月が特別に大きなイベントとなっている。 ・正月の遊びについては、昔とは大きく変化している。 本時の活動を振り返って、正月を民俗学の対象として研究する山田慎也先生に質問したいことを書く。	2023年の正月を楽しみ、今回の学習で理解したことを自分の家庭にも取り入れていこうとする意欲を育む。

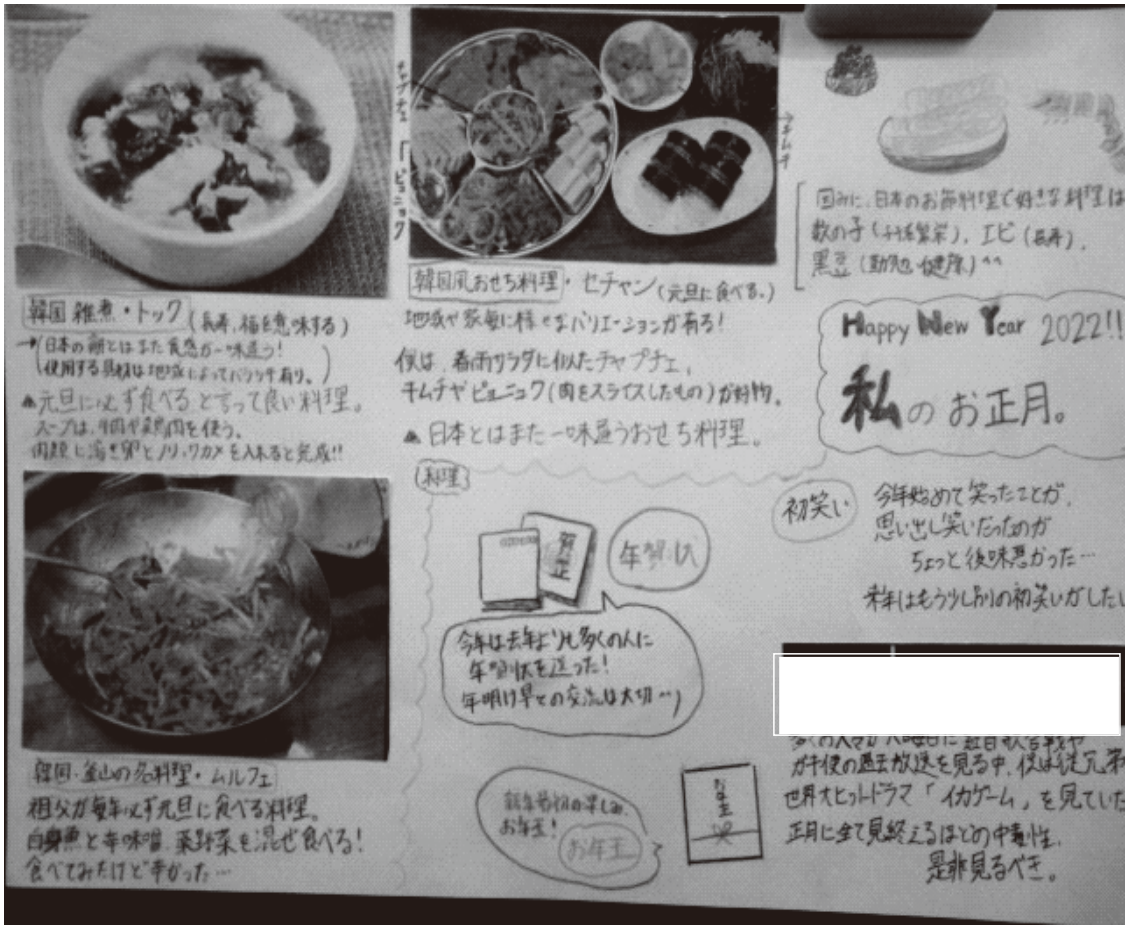
・　生徒が作成した「正月カード」

①　自分の家の正月に着目したカード

註　上記の「お正月カード」に関するプレゼンテーションを基にして、多くの生徒が、「お正月調べ」の学習での気づきや感想を、400～500 字程度にまとめ、新聞各社に投書した。下記③は、自分の家の正月の歴史について読売新聞の読者投書欄に発信し掲載されたものである。

勤務校での社会科では、学習テーマに関して生徒が、興味や関心を持ったりしたことがらや授業で話し合ったり、考えたことを新聞各社の読者投書欄へ主体的に発信する活動に取り組み、１年間で約８０点程度の生徒による投書が取り上げられている。

②　韓国にルーツを有する生徒が作成したカード



③　本実践についての新聞の読者投書欄への生徒による意見発信

2021年1月28日「読売新聞」・気流

雑煮に一族の歴史

社会科の授業で、それぞれの家のお雑煮について調べるという課題が出た。我が家の正月三が日は、毎日違う種類の雑煮を食べる。元日は父の故郷、岡山県由来のすまし汁。２日目は京都風の白みそ、最後は小豆を使った鳥取風の甘い雑煮だ。

なぜなのかと父に聞くと「我が家の習わしだ」と言われた。ご先祖は引っ越しが多かったようで、その影響で各地のお雑煮を食べるようになったらしい。自分の一族の歴史をすることができて楽しかった。

（註）　社会科の授業における様々な気づきや意見を中心として、新聞各社の読者投書欄に投稿する活動を年間を通じて行い、1 年間に約 80 点の生徒の投書が新聞に掲載される。令和元・２年度の博学連携の実践報告においても、歴博の旧石器時代のジオラマ展についてのビデオクリップ教材を取り上げた生徒による投書が「朝日新聞」・声の欄に掲載された。

５　成果と課題

本実践を構想した理由として、第 4 展示室が現在の内容に改修された直後に、常光徹教授による展示解説の機会を得て、民俗学の視点および研究対象を社会科学習に取り入れていくにあたって歴博の民俗展示は、展示内容の幅の広さと体系性という点から高い教育的価値を有するという気づきを得たことをあげたい。そして、本実践を検討する博学連携員研究会議で、山田慎也教授と出会い、直接指導助言を得ることができたことがある。

社会科学習が始まる小学校第 3 学年社会科は、身近な地域の特色やそこで暮らす人々の生活の特色についての理解を深めることを中心として学習内容が構成されている。そして、現代社会に残る昔の道具、人々の暮らしの移り変わり、昔から伝わる祭や行事という民俗学と高い親和性を有する学習が展開されている。そして、中学校社会科地理的分野では、地域の考察に当たっては、そこに暮らす人々の生活・文化、地域の伝統に着目した学習がもとめられている。同時に、歴史的分野では民俗学の成果や博物館、郷土資料館を活用した学習を取り入れていくこともとめられている。

本実践が日本の様々な地域の学習のまとめであるということに対して多くの生徒が「雑煮やお正月の行事を調べることが、どうして日本地理の学習のまとめになるのか？」という素朴な疑問と違和感を提示した。また、歴博で、お節料理や鏡餅が民俗展示として大規模に取り扱われていることに、「お正月を研究することで、日本で暮らす人々の生活や考え方の変化がわかってくる」ということに驚きを感じた。

歴博第 4 展示室の正月展示および山田慎也教授の解説は、「お正月調べ」活動に取り組む生徒たちの学習モチベーションを高めることにきわめて効果的であった。同時に、民俗全般に対する興味関心を高めることにもつながった。

また、正月をテーマとするグループ・プレゼンテーション活動を通して、生徒たちは、人々が新しい年を迎える祝いの気持ちは共通しているが、特に餅・雑煮・お節料理を中心とする食に着目すると家族・地域ごとに特色がみられ、日本列島で暮らす人々の多様性に気づくことができた。同時に、伝統文化はすべてが不変的なものではなくお節料理の内容に中華料理や欧風料理を取り入れるなどのグローバルな変化を見出すこともできた。「グループ・プレゼンテーションに取組んでみて、日本のお正月が、それぞれ家によってこんなにも違うのかという面と共通している点の両方に気が付いた。」という感想が多く出された。

「お正月調べ」活動が、インターネットや図書を活用した「コピー・アンド・ペースト」型に陥りがちな調べ学習とは異なり、一次情報である歴博展示を学習の導入として、実際に自分が体験する正月という年中行事についての「ファースト コンタクト」をそのままプレゼンテーションカードにまとめる活動であったことが素朴に面白かったという声が多く寄せられた。また、身近にあるスーパーマーケット、コンビニエンスストア、百貨店に行っ

てみると正月をはじめとして、主な年中行事にアクセスする入り口となることに気づいき、民俗に関する調査に対しての生徒が抱くハードルの高さが下がった。こうしたことから、人々の暮らしの姿を対象とする民俗学の視点を社会科学習に取り入れていくことが、生徒の探究への意欲を高めるうえで有効であると考えられる。

これからの社会を生きる生徒たちに対して、科学・テクノロジー・数学・工学・芸術を中核とする教科連携型の新たな学びとして、STEAM の重要性が提唱され始めている今日、人文社会系の歴博展示を活用した社会科学習においては、本実践の今後の可能性として、家庭科（食物と料理に関する学習）との連携を図った学習や「日本のお正月」を英語でも発信する英語科との連携を図った学習を教科間連携として学習指導計画に位置づけていく工夫を検討課題としたい。

また、本実践は、福田アジオによる太平洋戦争の敗戦によって発足した社会科がその初期においては、民俗学と密接な関係を持っていたが、地理・歴史・公民の分野別に学習内容が系統的に組織されることによりその関係が希薄化したという指摘と「我が国の「伝統」と「文化」」を重視する学習指導要領を、歴博展示を活用することにより批判的に検討することを試みたものである。

最後に、平成 20 年度から始まったこれまでの 7 期にわたる博学連携研究を振り返ってきたとき、冒頭でも記したように歴博の大きな特色の一つといえる第 4 展示室の民俗展示を活用した実践の試みは、まだ、非常に限られている。民俗展示を広く社会科学習で活用を試みていくことにより、現代社会を生きる生徒たちが、日本列島で生きた様々な人々の気持ち、感情、心性へと多面的・多角的に着目していく社会科における「新たな深い学び」を構築していく可能性を探っていきたい。

【参考文献】

国立歴史民俗博物館＋重信幸彦・小池淳一編　「民俗表象の現在　博物館型研究統合の視座から」岩田書院　2015 年
国立歴史民俗博物館　「わくわく探検　れきはく　日本の歴史５　民俗」吉川弘文館　2018 年
福田アジオ　「現代日本の民俗学　ポスト柳田の五〇年」　吉川弘文館　2014 年
市川秀之　中野紀和　篠原徹　常光徹　福田アジオ編著　「はじめて学ぶ　民俗学」ミネレヴァ書房　2015 年
石井研士　「日本人の一年と一生」春秋社　2020 年
畑中章宏　「21 世紀の民俗学」角川書店　2017 年
藤井青銅　「「日本の伝統」の正体」柏書房 2018 年